

鈴木明彦¹：北海道厚田沖合から得られたオウナガイ化石Akihiko SUZUKI¹：Fossil *Conchocele bisecta* dredged off Atsuta, Hokkaido

1997年6月頃、北海道石狩市の厚田沖合の北西水深約20mの海底(図1)から、魚介類調査に伴って岩石片が採取され、この中に明らかに二枚貝化石が認められた。今回この二枚貝化石を検討した結果、オウナガイであることが判明したので報告する。

殻は中型で、かなり膨らみが強い。外形はほぼ斜四辺形をなす。殻長64.5mm、殻高62.9mmおよび殻厚40.5mmである。殻長の方が殻高よりも長い。殻頂角は約110°である。殻頂はやや前方に張り出し、前背部は切断状となる。前背縁は中央付近で膨らみ、前背縁からほぼ直角に近い角度で腹縁にいたる。腹縁は中央付近で緩やかに湾曲し、後端付近ではより強く湾曲する。後背部では、殻頂やや後方より後縁にかけ1本の明瞭な溝がある。この溝の上部には、これに伴って1本の褶が後縁に伸びる。また、内側雄型には放射状の彫刻が認められた。以上の特徴から、オウナガイ *Conchocele bisecta* (Conrad) に同定した(図2)。なお、オウナガイはハナシガイ科に属する大型の二枚貝で、最近では化学合成群集の主要な一員として注目されている(天野 2014)。

厚田-望来地域に分布する新第三系は、下位から厚田層、盤ノ沢層、望来層および当別層に区分される(対馬ほか 1956; 岡村・高野 2010)。これらはいずれも海成層であり、貝化石、有孔虫化石、珪藻化石などを含んでいる。また、上記の地層は陸域のみならず厚田沖合の海底にも、広く分布している(内田ほか 2003)。

このうち、オウナガイ化石の産出が確認されているのは、厚田層、盤ノ沢層、望来層である(対馬ほか 1956)。今回検討したオウナガイは硬質の泥岩で保存がよく、望来層からの標本(石灰質団塊中)に酷似していた。一方、厚田層、盤ノ沢層からのオウナガイはやや軟質の泥岩や細粒砂岩であるため、保存はそれほどよくない。

以上の点から、このオウナガイ化石は海底あるいは沿岸に分布する望来層に由来するものと考えた。なお、厚田-望来地域の海岸には、地層から洗い出された保存の良い貝化石がしばしば打ち上げられる(鈴木 2011)。最後に今回化石標本を提供して下さった北海道立中央水産試験所の干川裕博士に御礼申し上げる。

引用文献

- 天野和孝 2014. 化学合成二枚貝の化石記録と進化. 化石 96: 5-14.
 岡村聡・高野修 2010. 新第三紀の島弧会合部の地質体, 北海道西部 樺戸山地西部地域, 193-196. 日本地質学会編, 日本地方地質誌 北海道地方, 朝倉書店, 東京.
 鈴木明彦 2011. 望来海岸へ, 10-16. 宮坂省吾ほか4名編, 札幌の自然を歩く(第3版), 北海道大学出版会, 札幌.
 対馬伸六・垣見俊弘・植村武 1956. 5万分の1地質図幅「厚田」および同説明書. 32p., 地質調査所, 東京.
 内田康人・菅 和哉・嵯峨山積・村山泰司・濱田誠一・川森博史・大澤賢人・仁科健二 2003. 北海道沿岸域の地質・底質環境(3) 日本海北部海域. 58p., 北海道立地質研究所, 札幌.

(Received Mar. 25, 2019; accepted Apr. 25, 2019)

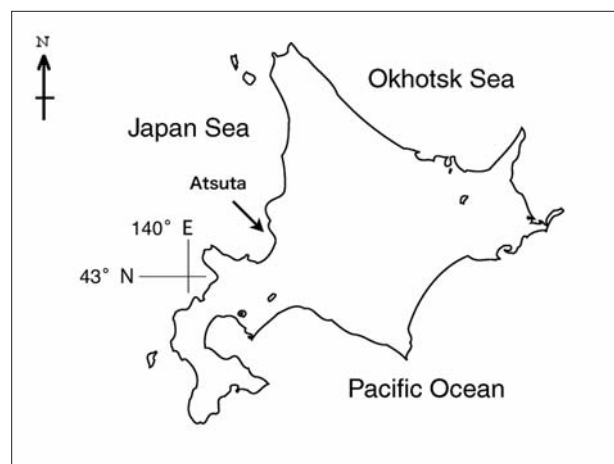
¹〒002-8502 札幌市北区あいの里5-3-1 北海道教育大学札幌校

図1 北海道厚田の位置



図2 厚田沖から得られたオウナガイ化石